

幼保小における学びの接続の探究 (その1) —遊びにおける学びの要素に着目して—

新井美保子* 千田隆弘**

*幼児教育講座

**名古屋文化学園保育専門学校

A Study of Learning in Relation between Kindergarten, Day Nursery and Elementary School : What Young Children Learn through Play

Mihoko ARAI* and Takahiro SENDA**

**Department of early childhood education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

***Nagoya Bunka Gakuen Academy, Nagoya 461-0011, Japan*

I. 研究目的

平成20年に幼稚園教育要領(以下教育要領)、保育所保育指針(以下指針)並びに、小学校学習指導要領(以下指導要領)が改訂され、幼稚園・保育所と小学校との連携の必要性が一層高まってきている。例えば、教育要領では「指導計画の作成に当たっての留意事項」として、「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること」「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること」と記述されている。また、指導要領においても、例えば国語科の「指導計画の作成と内容の取扱い」欄に、「低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、幼稚園教育における言葉に関する内容などとの関連を考慮すること」と記述されている他、同様の記述が音楽科や図画工作科にも見られる。生活科では「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること」と明示されるなど、小学校も幼稚園教育とのつながりをもつことが求められるようになった。このように、幼稚園教育から小学校教育への円滑な接続、つまり、幼児期の教育や生活から小学校教育への連続性を幼稚園・保育所・小学校ともにさらに意識化することの必要性や、学校教育法第22条(幼稚園の目的)にあるように、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」という視点

が、現在の保育において求められている。

これらの改訂に先立って、2005年1月には、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」において、幼児の育ちの現状として、「基本的な生活習慣や態度が身に付いていない」「他者とのかかわりが苦手である」「運動能力が低下している」「自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない」などの他、「小学校1年生などの教室において、学習に集中できない、教員の話の聞けずに授業が成立しないなど学級がうまく機能しない」「知識は増えたが断片的で受け身的なものが多く、学びに対する意欲や関心が低い」などの課題が指摘された。そして、今後の幼児教育の方向性について、幼稚園等施設と家庭、地域社会の三者による総合的な幼児教育の推進と、幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実を提唱している。確かに、現代の子どもたちが抱えるこれらの諸課題の背景には社会的な要因も様々に関係しており、その解決には保育者による保育だけでは不可能であるし、小学校入学以降も引き続き指導が求められる。また、幼児期の発達や学びが小学校以降とどのようにつながっているのかを知り、長期的な視点を持って保育に携わることは、人を育てる上で当然に必要なことである。しかし、これまでの保育の場においては、小学校以降の教育について関心が高かったと言えるであろうか。むしろ、幼児期の特性を尊重する立場から、あまり小学校以降の教育には注目してこなかったのではないだろうか。

しかし、一方で小学校教育との連携・接続の強化となると、保育者の中には小学校入学のための準備教育

や、小学校教育の先取りと捉える場合もあることが予想される。例えば、かつて昭和後半期の6領域時代には、保育者が主導し、小学校の教科と領域を結びつけたいわゆる領域別保育の実施が多く見られた。そのことの反省に立って、子どもの主体性を育て、子どもの発達に即した保育が現在は実施されている。従って、小学校入学のための準備教育という目的ではなく、真に義務教育およびその後の教育の基礎を培うという目的において、幼児期に適した保育のあり方を検討していかなければならない。このように考えると、小学校教育への円滑な接続を構築する要因としては、大きく2点があると考えられる。まずは、小学校という環境や小学校の生活・授業方法に慣れるための手立てを検討すること、2番目には幼児期の学びと小学校教育の学びの連続性を検討することである。

前者については、ここ数年、小学校と幼稚園等施設との入学前の連絡会の実施を始め、幼児と児童との交流活動などが実施されるようになってきた。しかし、後者については、5歳児後半から小学1年生1学期までのいわゆる「接続期」のカリキュラム検討がわずかに見られる程度であり、広く幼児期と小学校教育との学びの連続性について検討することは今後の課題といえる。幼児は、様々な遊びを通して学習をしており、その遊びにおける学びの内容は、発達の連続性から考えれば、小学校での学びにつながっていると考えられる。確かに、幼児の学びは教科別でもなく系統的でもない。各自の興味・関心や必要感に応じて、周囲の人や物とかかわり、徐々に理解を広げ深めていく。このように小学校教育とは学習方法に違いがあり、幼児期に何を学んでいるのかは表面的にはなかなか明確にしにくい。しかし、小学校教育以降で学ぶ各教科の内容の基礎となる体験を、幼児期には何らかの形で経験し、それらに対する興味・関心などの心情や意欲、態度を培ったりしているのではないだろうか。

そこで本研究では、現在この東海地区で実施されている幼保小の連携状況の実態を把握し課題を探ると共に、保育における遊びと小学校の学習との関連性を探ることを目的として、保育者を対象とした調査を実施した。

Ⅱ. 調査概要

(1) 調査対象と調査時期

名古屋市を含む愛知県と、岐阜県、三重県内の公立幼稚園166園、私立幼稚園188園、公立保育所183園、私立保育所171園の合計708園を無作為に抽出し、各園の5歳児の担任保育者1名を対象とし、2008年12月に実施した。

(2) 調査方法

調査用紙を各園に郵送し、回答後は個々に返送して

いただいた。調査対象は、各園に1名ずつの合計708名、回答数は377名(回収率53.2%)、有効回答数は372名であった。

(3) 調査項目

主な調査項目は、小学校との連携方法や、保育において入学を意識して行っている指導・援助、並びに遊びに含まれる内容等についてである。

遊びに含まれる学びの要素の項目は、小学校教育との関連性を調査する観点から、指導要領における各教科の低学年に記載された目標及び内容をできるだけ具体的な形で抽出し、保育場面を想定した上で項目を作成した。また、幼児の遊びや生活場面には、理科や社会科、家庭科の内容も含まれる可能性を予想し、中学年の理科、社会科及び高学年の家庭科からも項目を作成した。生活科は、理科、社会科に含めて作成・分析した。

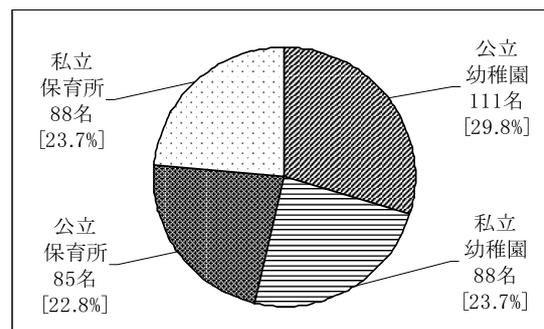
Ⅲ. 結果

(1) 回答者の属性

回答者372名の内訳は、【図1】に示したように、「幼稚園」199名(公立111名、私立88名)、「保育所」173名(公立85名、私立88名)であった。勤務地域は、「愛知県」206名[55.4%]、「岐阜県」97名[26.1%]、「三重県」69名[18.5%]である。職種は、「常勤の教諭又は保育士」が361名[97.0%]を占め、「臨時(嘱託・パート)の教諭又は保育士」は6名[1.6%]であった。

学歴は、「短大・専門学校卒」が309名[83.1%]と多数を占め、次いで「大学卒」57名[15.3%]、「高校卒」4名[1.1%]、「大学院修了」1名[0.3%]の順であった。性別は、「女性」が364名[97.8%]、「男性」は6名[1.6%]である。勤続年数は、「1～5年」63名[16.9%]、「6～10年」96名[25.8%]、「11～15年」55名[14.8%]、「16～20年」58名[15.6%]、「21～25年」31名[8.3%]、「26～30年」40名[10.8%]、「31年以上」16名[4.3%]であり、「6～10年」の勤続年数の保育者が他に比較して多く、10年以下の保育者が全回答者の4割以上を占めている。

取得資格・免許を複数回答で尋ねたところ、「幼稚園

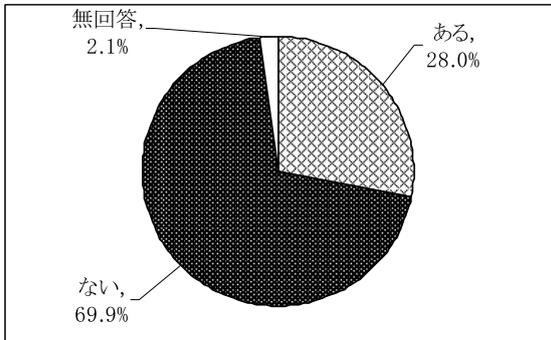


【図1】有効回答アンケートの内訳

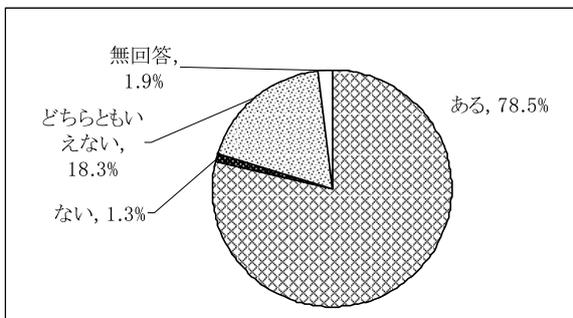
教諭免許状」341名 [91.7%], 「保育士資格」331名 [89.0%] に対し, 「小学校教諭免許状」は33名 [8.9%] と1割に満たない状況である。また, 小・中・高校在学中に好きだった科目を3つ以下で回答してもらったところ, 「音楽」[59.9%], 「体育」[42.2%], 「国語」[40.9%], 「図工」[28.5%], 「算数・数学」[28.0%] の順で多かった。反対に, 小・中・高校在学中に嫌いだった科目を同様に回答してもらったところ, 「算数・数学」[44.9%], 「理科」[37.1%], 「社会」[30.9%], 「英語」[26.1%], 「図工」[14.5%] の順で多かった。音楽や体育等の実技系科目を好み, 理数系科目を敬遠する傾向がうかがえる。

(2) 小学校との連携

主な調査項目とその結果を挙げる。まず「指導要領



【図2】 指導要領を読んだことがありますか

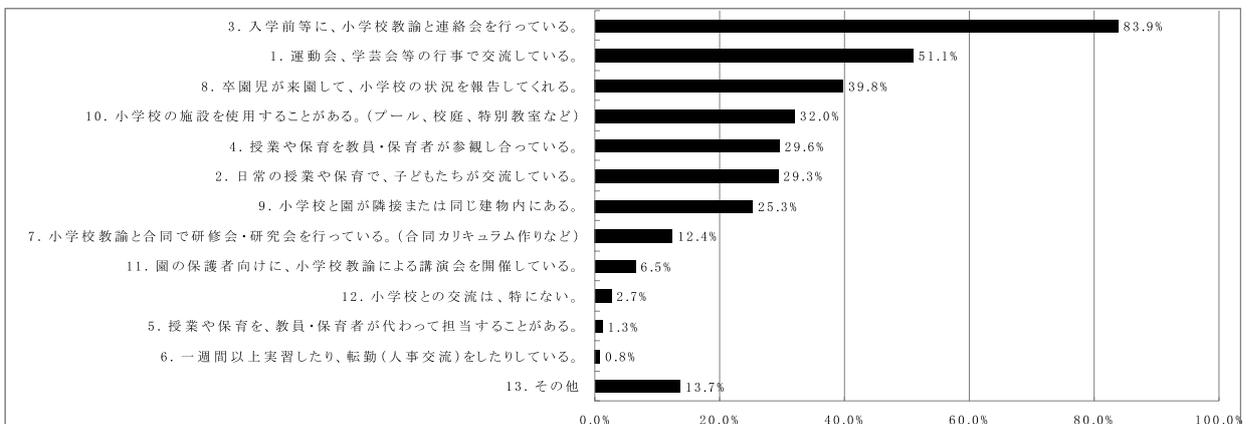


【図3】 小学校教育に関心はありますか

を読んだことがありますか」では, 「ある [28.0%], ない [69.9%]」【図2】, 「小学校教育に関心はありますか」では, 「ある [78.5%], ない [1.3%], どちらともいえない [18.3%]」【図3】という結果が得られた。また, 「小学校との交流の機会」について13項目尋ねたところ, 実施率が高い項目は「3. 入学前等に, 小学校教諭と連絡会を行っている [83.9%]」や「1. 運動会, 学芸会等の行事で交流している [51.1%]」, 低い項目は「6. 一週間以上実習したり, 転勤 (人事交流) をしたりしている [0.8%]」や「5. 授業や保育を, 教員・保育者が代わって担当することがある [1.3%]」, そして, 「12. 交流はない [2.7%]」等の結果が得られた【図4】。

以上から, 保育者の多くは小学校教育に関心があるものの, 小学校教育の根拠となる指導要領を読んだことがある者は3割弱と少ない結果となった。これは, 小学校教諭免許状を取得している保育者が1割に満たないという少なさとともに, 保育者養成校において小学校教育について学ぶ科目が設置されておらず, 指導要領に触れる機会がないことが大きいと考えられる。小学校との交流については, 「連絡会」が8割以上と多いものの実施されていない所も依然としてあることがわかった。また, 比較的交流しやすい方法と考えられる「行事での交流」も5割にとどまり, 互いの教育・保育の理解を深めることに役立つ保育現場や教育現場の参観や, 小学校入学に向けて直接的に効果が期待される幼児・児童の交流などは, 3割と少ない状況であった。小学校, 幼稚園・保育所共に教員も保育者も多忙であり, 日常の保育や授業を離れて参観したり, 新たな交流活動や授業を企画・実施したりすることの困難さが推測される。また, 1つの幼稚園や保育所からは複数の小学校に進学するため, 進学先が分散する場合は特定の小学校との連携が取りにくいと考えられる。

「小学校入学に向けて学習面で意識して指導・援助していただけることはありますか」では, 「12. 静かに集中して保育者の話を聞くように言葉掛けをする [96.5%]」, 「11. 自分の持ち物の始末をきちんとするように言葉掛けをする [94.9%]」 「8. 時間を意識するよ



【図4】 小学校との交流の機会

うな言葉掛けをする [90.3%]] が9割以上と実施率が高かった。次いで、「1. 文字を使った遊びを取り入れる [86.3%]]」「2. 数を使った遊びを取り入れる [81.5%]]」「10. クラス全員の前に立って、話をする機会を設ける [80.1%]]」が8割台の実施率であった。これらに見るように、小学校の授業・生活形態や内容を予想し、それをかなり意識した指導が実施されていることがわかる。また、「3. 文字を書く練習や活動を行う [49.5%]]」や実施率は低いものの「4. 簡単な計算練習を行う [8.9%]]」という回答も見られ、国語や算数に直結する活動が行われていることもわかった【図5】。

(3) 教科別に見る「遊びにおける学びの要素」

遊びの中にどのような学びの要素があるかを明らかにし、日頃の保育と小学校での学習との関連を探るため、調査概要で述べたように、「遊びにおける学びの要素」74項目を指導要領の目標や内容をもとに作成した。これらの項目について、「日頃の保育（遊びや生活）の中でも、幼児がこのような体験をするように取り入れたり、意識して幼児に指導・援助したりすることがあるか」を尋ね、「よく行っている」「行うことがある」「あまり行わない」の3段階で回答してもらった。質問紙では分別しなかったが、ここでは把握しやすくするため、算数科、理科（生活科を含む）、社会科（生活科を含む）、図画工作科、国語科、音楽科、体育科、家庭科、道徳の以上9つの教科毎に図にまとめ分析する。

結果としては、多くの園においてほとんどの項目を保育の中に見ることができた。特に、よく行われていた項目は、1位「走る [94.7%]]」、2位「体を動かす楽しさや心地よさを味わう [94.1%]]」「土や砂、泥を使って遊ぶ [94.1%]]」、4位「自分がやらなければならない当番活動等を、しっかりと行う [92.8%]]」、5位「鬼遊びをする [92.6%]]」、6位「友達と仲良くし、助け合う [92.5%]]」、7位「気持ちのよいあいさつや言葉遣い、動作などを心掛ける [92.0%]]」、8位「年少者などに対し、温かい心で接し親切にする [91.5%]]」、9位「ボール遊びをする [91.2%]]」、10位「規則正しく健康に気をつけて生活する [90.8%]]」であった。

小学校の教科別的にみると、このように道徳的項目【図6-ix】や体育科的項目【図6-vii】で、8割～9割の回答項目が多い。次いで、物質特性の理解につながる理科的項目【図6-ii】（前述した「土・砂・泥」の他、「水を使って遊ぶ [88.4%]]」「植物を栽培する [87.7%]]」「昆虫などの小動物に関わる [87.5%]]」「四季の変化に気付く [83.6%]]」など）や、図画工作科的項目【図6-iv】（「身近な材料や用具を適切に扱う [86.2%]]」「人工の素材（紙皿やプリンカップ等）を用いた制作をする [85.9%]]」「好きな色を選んで表現活動をする [84.3%]]」など）も、8割を越す回答が多い。国語科的項目【図6-v】も、「大事なことを聞き漏ら

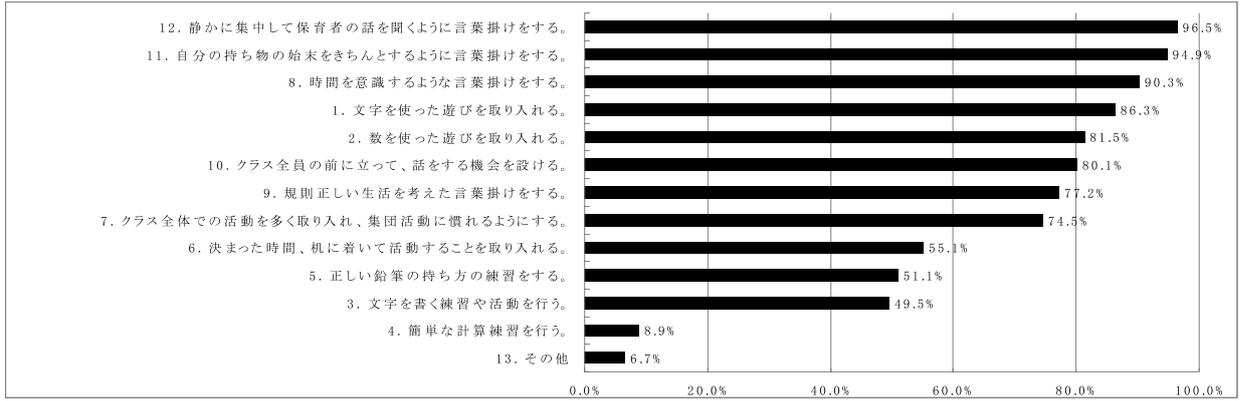
さずに、興味を持って聞く [85.5%]]」「経験したことを話したり、説明したりする [82.9%]]」「登場人物に注目し、想像しながら絵本などを見る [81.5%]]」「事柄を順序立てて話す [79.7%]]」など、すべての項目が7～8割に集中しており、日頃から意識して活動が取り入れられたり指導がなされていることがわかる。

このように多くの項目が70%を越える中で、6割に達しない項目もみられた。あまり取り入れられていない項目としては低い順に、1位「電気（電池、豆電球など）を使って遊ぶ（カセット操作は含まず） [32.6%]]」、2位「磁石を使って遊ぶ [40.9%]]」、3位「地域のお店や工場を見学して、生産・販売の仕事に興味を持つ [41.8%]]」、4位「曲を聴いて想像したことや感じたことを話す [50.2%]]」、5位「重さ比べや水に物を浮かせて遊ぶ [50.7%]]」、6位「ゴムを使って遊ぶ [51.8%]]」、7位「光や日なた・日陰を意識した遊びをする（OHPの操作も含む） [52.2%]]」、8位「通学路当番などの地域の人々に親しみをもつ [53.7%]]」、9位「天気や天体について興味をもつ [60.7%]]」、10位「時計の読み方がわかる [60.8%]]」であった。これらを見ると、理科的項目【図6-ii】の中でも物理的な科学的内容は保育に取り入れられることが少ない状況であること、社会科的項目【図6-iii】では身近な地域を散歩することはあっても、具体的に地域の人々と話したり関わったりする経験が少ない状況がわかる。

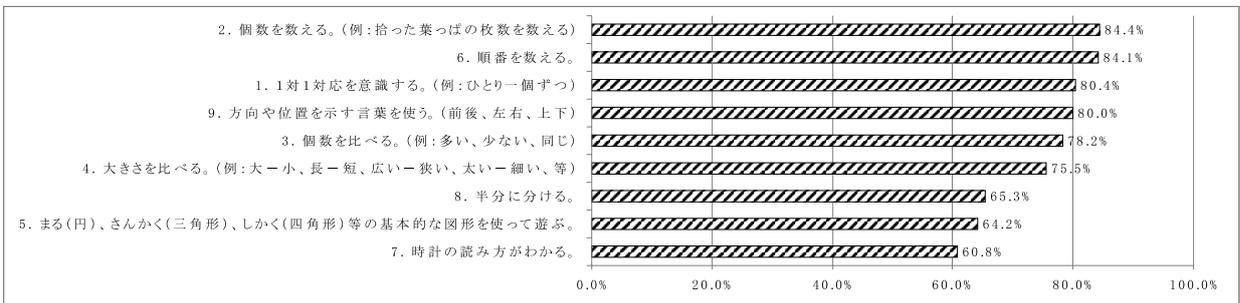
算数科的項目【図6-i】においても、「個数を数える（例：拾った葉っぱの枚数を数える） [84.4%]]」「順番を数える [84.1%]]」などのように、数の理解につながる内容で日常多く経験がなされている一方で、「半分に分ける [65.3%]]」「まる（円）、さんかく（三角形）、しかく（四角形）等の基本的な図形を使って遊ぶ [64.2%]]」などのように、2/3程度の回答にとどまっている項目もあり、遊びの中でどのような学びを重要と思い保育者が意識して幼児を援助するか、また、その時を活かした指導ができるかによって、差が生じてきているのではないかとということが考えられる。同様に、音楽科的項目【図6-vi】においても、「身近な楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏する [80.6%]]」のように、日常、歌を歌ったり楽器に触れたりする機会が多いと思われるものの、「歌声や発音に気をつけて歌う [74.6%]]」「歌詞の情景や曲の気分を感じながら歌う [72.8%]]」などは7割であり、そこで保育者がどのようなねらいをもって幼児を援助するかという差が、幼児の学びに影響するのではないかと考えられる。

また、全体的に8割を超える回答が多かった体育科的項目【図6-vii】においても、「マットを使って運動遊びをする [69.7%]]」「跳び箱を使って運動遊びをする [68.0%]]」の2項目が6割台と低く、保育に取り入れやすい活動とそうではない活動があることが明らか

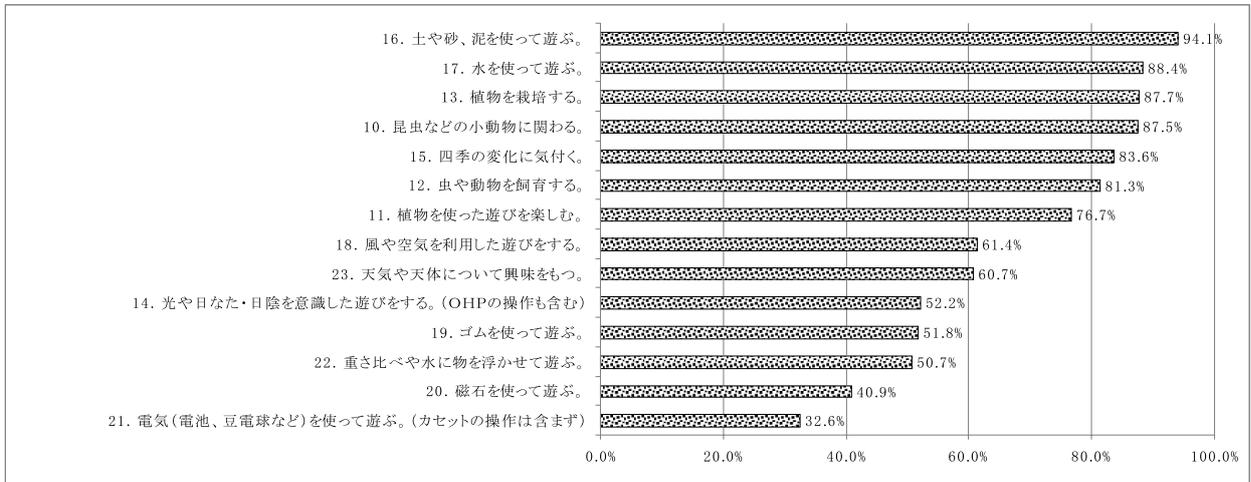
幼保小における学びの接続の探究（その1）



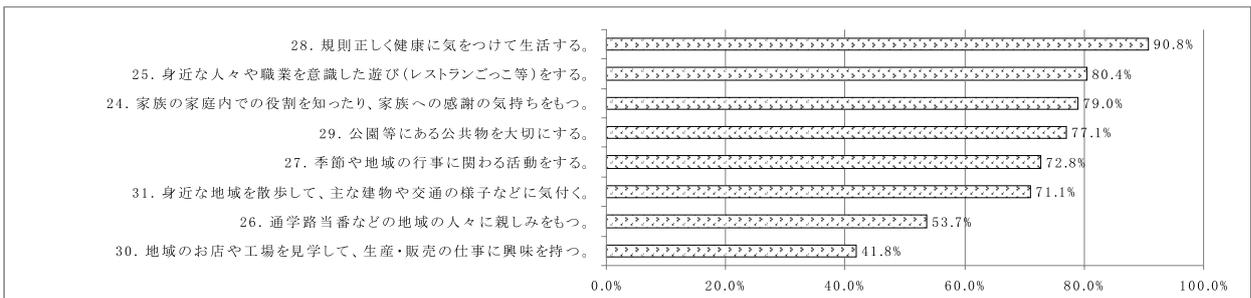
【図5】 小学校入学に向けて学習面で意識して指導・援助しておられることはありますか



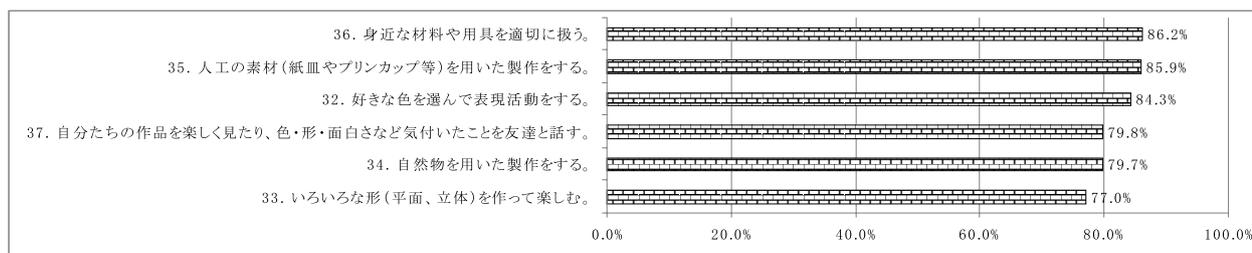
【図6-i】 算数科的項目



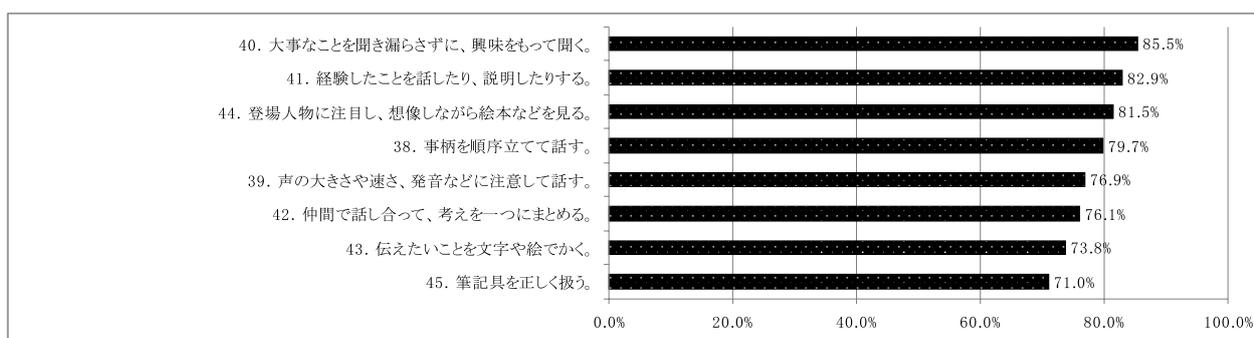
【図6-ii】 理科的項目



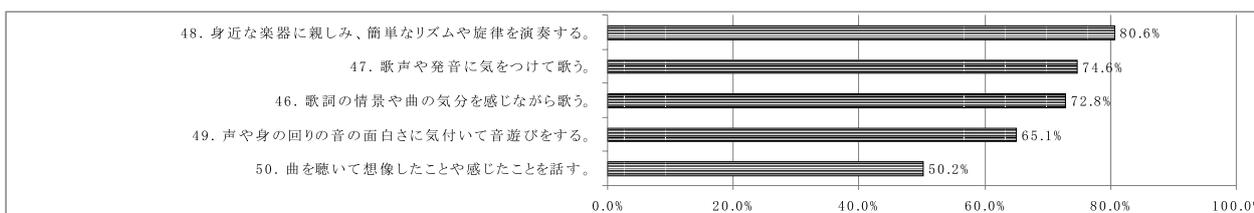
【図6-iii】 社会的項目



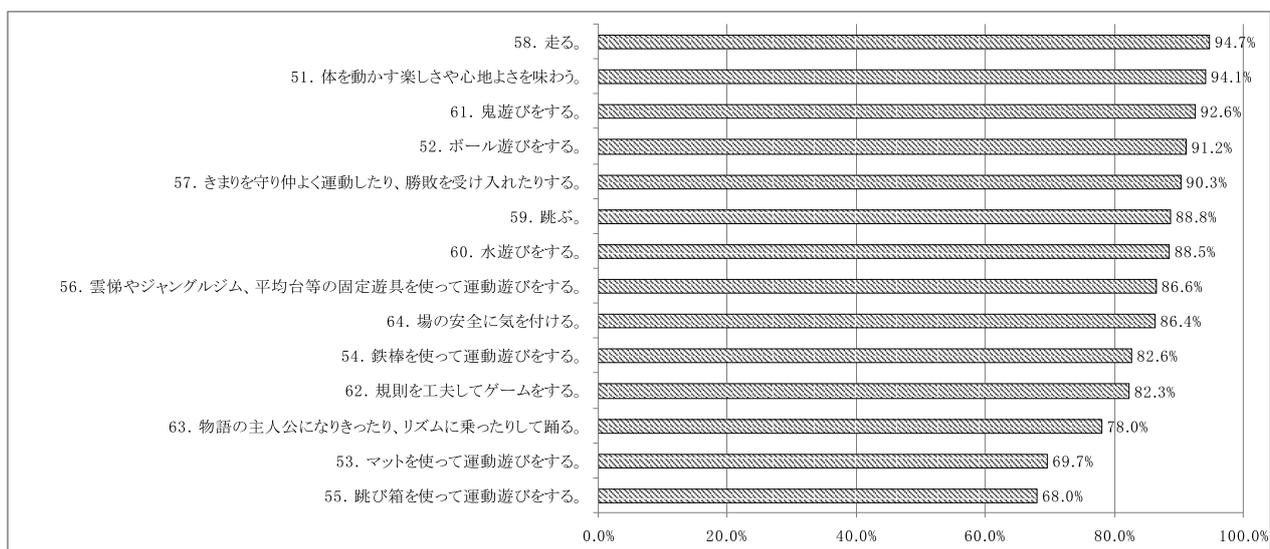
【図6-iv】 図画工作科的項目



【図6-v】 国語科的項目



【図6-vi】 音楽科的項目



【図6-vii】 体育科的項目

になった。

(4) 具体的遊びに含まれる「学びの要素」

遊びの具体例 (①砂場での活動, ②お店屋さんごっこ(商品作りも含む), ③劇遊び(発表会も含む), ④ドッジボール) を挙げ、いずれも複数の幼児たちで活

動している場合を前提として、そこにどのような内容が含まれるのかを、前述の74項目の中から5つ以内で答えてもらった。

「①砂場での活動」では「土や砂、泥を使って遊ぶ [87.9%]」「水を使って遊ぶ [63.7%]」の2つに回答が集中し、その他は「友達と仲よくし、助け合う

「36.6%」「大きさを比べる [25.8%]」「いろいろな形を作って楽しむ [24.2%]」等であった。複数の幼児で遊ぶ場合でも、砂場の活動は、人とかかわりよりも砂・土・泥・水などの物とかかわりが主であり、それらの物とかかわりこそが幼児にとっては魅力であり重要な学びであると考えられる。しかし、友達とかかわりや、大きさ比べ、製作、会話など、回答率は多くないものの多種多様な学びの要素が含まれていることがわかり、幼児の学びにとって欠かせない総合的な活動の1つであると言える。【図7-①】

「② お店やさんごっこ（商品作りも含む）」では、「身近な人々や職業を意識した遊び（レストランごっこ等）をする [62.9%]」「人工の素材（紙皿やプリンカップ等）を用いた製作をする [60.2%]」が60%以上の回答となった他、「身近な材料や用具を適切に扱う [44.9%]」「個数を数える [35.5%]」「仲間で話し合っ、考えを一つにまとめる [24.5%]」「いろいろな形（平面、立体）を作って楽しむ [22.8%]」「自然物を用いた製作をする [22.6%]」「自分たちの作品を楽しく見たり、色・形・面白さなど気付いたことを友達と話す [21.2%]」等の回答が得られた。全体としては、社会的な項目よりも、むしろ製作に関わる項目が多く挙げられていることが特徴的である。【図7-②】

「③ 劇遊び」では「声の大きさや速さ、発音などに注意して話す [60.2%]」「登場人物に注目し、想像しながら絵本などを見る [57.0%]」「仲間で話し合っ、考えを一つにまとめる [50.8%]」等の国語科的項目が多いことと、「物語の主人公になりきったり、リズムに乗ったりして踊る [58.9%]」「歌詞の情景や曲の気分を感じながら歌う [27.2%]」「歌声や発音に気をつけて歌う [20.2%]」「身近な楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏する [18.8%]」等の音楽科や身体表現にかかわる学びが、特徴としてあげられる。【図7-③】

「④ ドッジボール」では、「きまりを守り仲よく運動したり、勝敗を受け入れたりする [82.5%]」「体を動かす楽しさや心地よさを味わう [77.2%]」「ボール遊びをする [76.9%]」に回答が集中した他、「規則を工夫してゲームをする [37.4%]」「場の安全に気を付ける [25.3%]」など、体育科的な項目が多く挙げられた。活動の内容としては、友達とかかわりや数の比較なども重要な要素であると考えられるが、幼児にとっては運動面の学びが中心であることがわかる。【図7-④】

なお、【図7-①～④】は、各遊びに見られる活動の、上位10項目をまとめたものであり、グラフの色等によって、各教科的項目（【図6-i】算数科的項目～【図6-ix】道徳科的項目）との関連を見ることができ

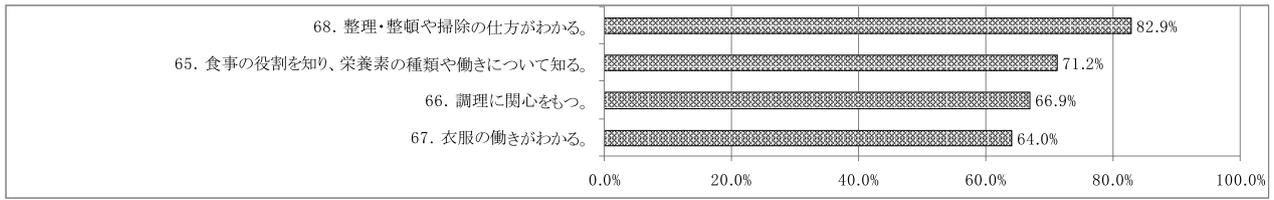
これにより、各遊びには多様な「学びの要素」が含

まれていることがわかり、後の学習の基盤になっていることがうかがえる。また、それぞれの遊びにおける学びの要素は異なるため、そのことを意識した援助を行うとともに、学びのバランスを考慮して様々な遊びを保育に取り入れることも重要なことではないだろうか。

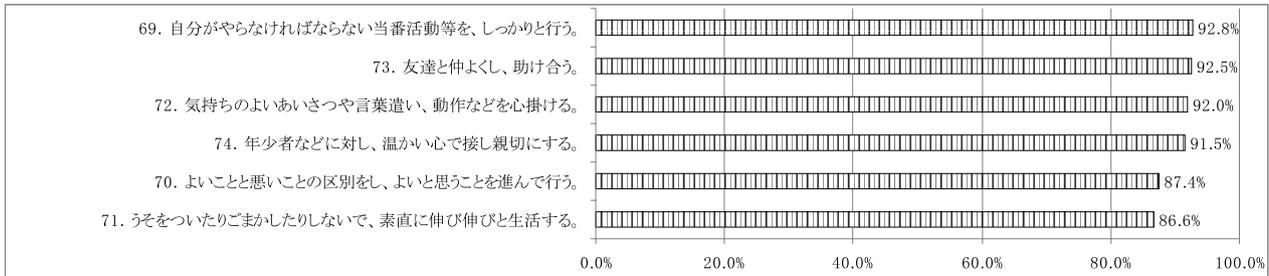
IV. 考 察

今回の調査を通して、日常の保育において幼児が小学校以降の教育内容につながる多くの様々な活動を経験し、学んでいることが明らかになった。教科別的に言えば、特に道徳や体育科に関連する経験が多く、ついで、理科、図画工作、国語などが多く見られた。現行の教育要領等において、幼児の心身の健康増進を図り戸外遊びを推進してきていることや、人とかかわる力を育てること、自然とかかわりを促進することなどの取り組みが、一定の成果となって表れてきているといえる。これらの結果から考えると、小学校との連携を強化するために、今からさらに何か特別な活動を取り入れるというのではなく、むしろ、現在実施されている活動の中で、どのようなねらいをもって幼児を援助するかが重要であり、それが保育の充実にもつながるのではないかと考える。つまり、すでに小学校以降の学びにつながる基礎体験を幼児は行っており、そこで何を育てるかを、発達に基づいた長期的視点とともに具体的視点を持って援助していく力量が保育者には求められているのではないだろうか。

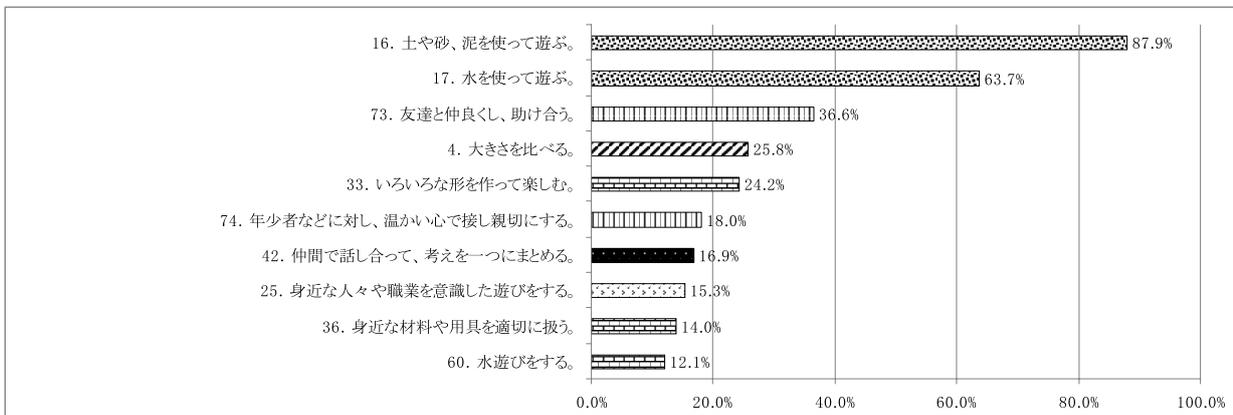
それに加えて、幼児が身の回りの人や物と関わって学んでいくことを考えれば、やはり活動選択を含む環境構成のあり方は重要である。今回の調査からは、物理科学的な活動が少ない状況が明らかになった。平成元年に教育要領が改定される以前は、例えば領域「自然」の内容に「日常生活を通して、物の性質の違いや、電気、熱、光、音などの事象に興味や関心をもつ」「身近な乗り物やおもちゃなどについて、その動きやしぐみに興味や関心をもつ」などの事項が具体的に示されていた。平成元年の改定でこれらの記述がなくなり、例えば「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ」「身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」という抽象的な記述の仕方になった。個々の幼児の興味・関心に応じた柔軟な教材選択が可能となった一方で、結果として現在の保育が自然とかかわりに特化してきている傾向が感じられる。小学校教育との連続性を考える前に、幼児期として、物理学的な学びにつながる環境構成を今後工夫する必要があるのかどうか、考えることが必要ではないだろうか。また、保育者は高校在学中まで、理数系科目をあまり得意とはしていなかった人が多いことを考えれば、保育者自身がまず物理的な学びにつながる活動に興味をもち楽し



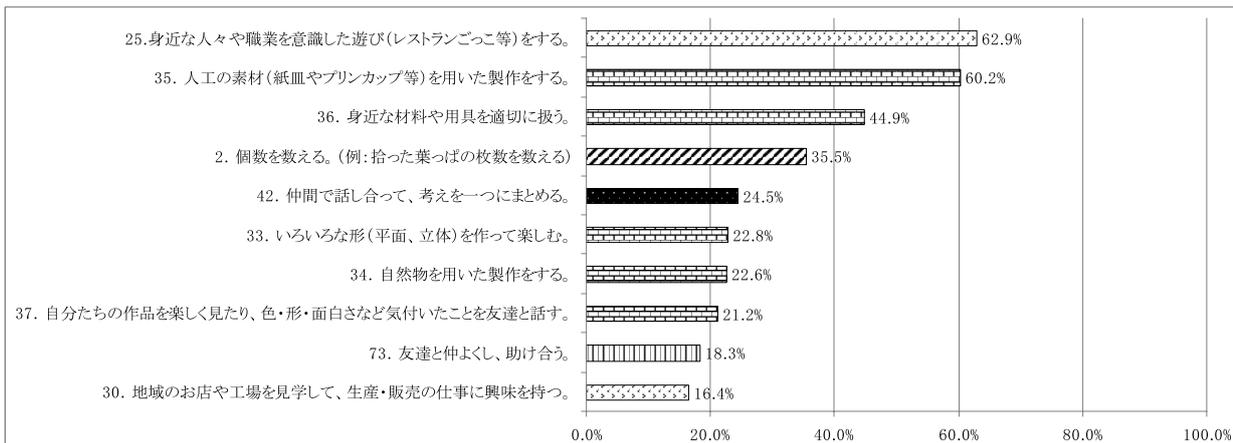
【図6-viii】家庭科的項目



【図6-ix】道徳的項目



【図7-①】砂場での活動

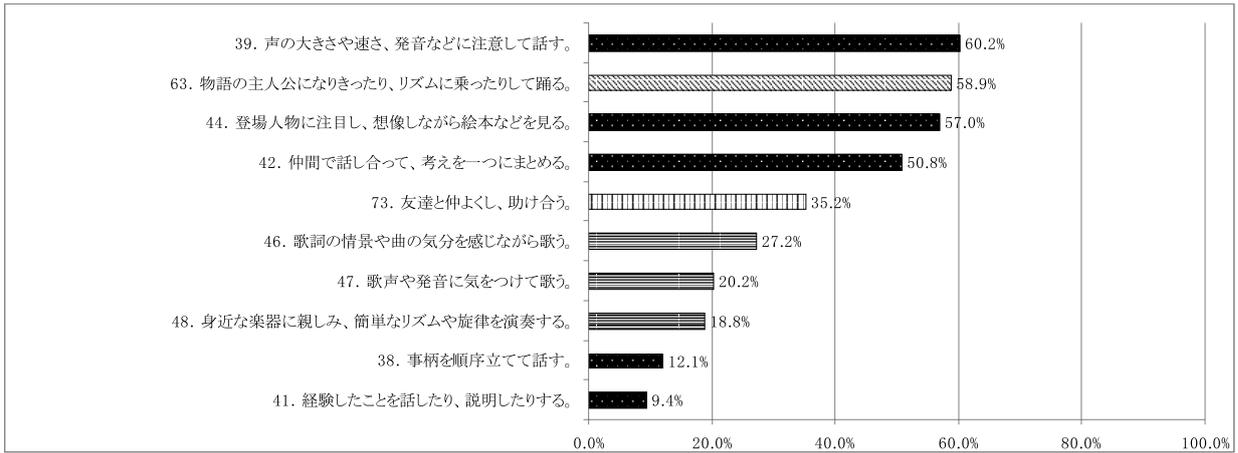


【図7-②】お店屋さんごっこ(商品作りも含む)

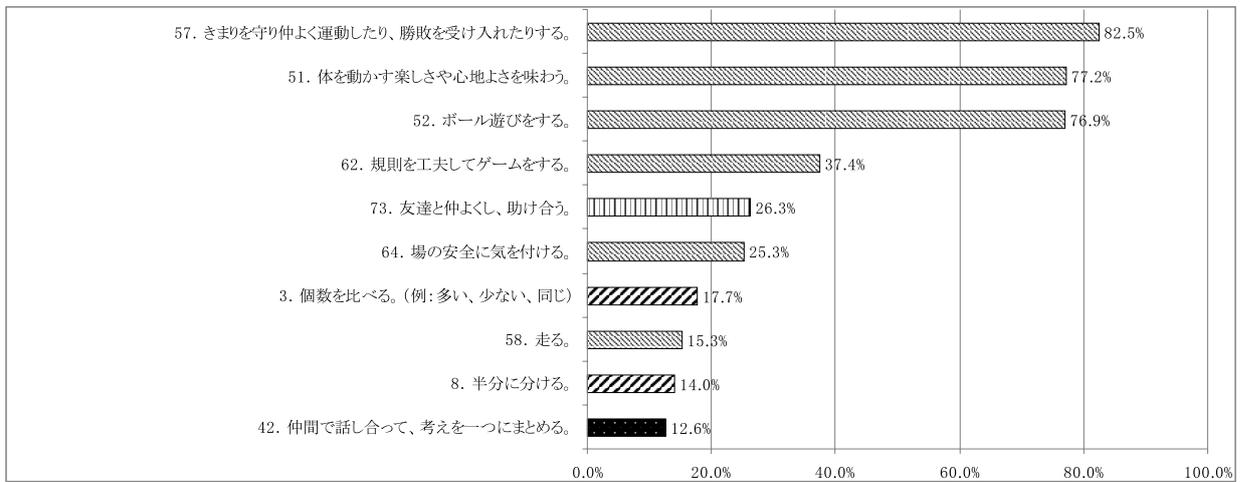
む機会を、研修等で設定することが必要かもしれない。

幼児期の学びは教科ごとではなく、興味・関心に応じて柔軟に総合的に広まり深まっていく。その点を十分に配慮しながら、現在の環境構成がこれで幼児の好

奇心や発達に十分に応えうるものになっているかどうかを絶えず反省することが重要であろう。保護者のニーズや社会状況の変化があるとはいえ、小学校で学ぶ内容を先取りすることを意味しているのではない。幼児期特有の学びを阻害することのないようにした



【図7-③】劇遊び



【図7-④】ドッジボール

い。

また、これらの調査結果から、幼児が日頃の遊びや生活を通して、何を学んでいるのかを具体的に明らかにすることができた。遊びによって学ぶ要素が異なることやその内容を理解して、幼児期の過ごし方を幼児の視点から考えていくことが必要であろう。

V. ま と め

保育は遊びと生活によって成り立ち、子どもはその中で様々な事を学んでいく。その学びが後の学習の土台となるようにしつつも、教科のように別々ではなく、保育の中で総合的に学ぶことのできるようにしたい。そのためにも、さらに幼保小の交流機会を増やすとともに、教育要領や指針だけでなく指導要領にも目を通し、幼児期と児童期それぞれの保育・教育の独自性を尊重した上での真の連携のあり方を考えていく必要がある。

今回は、調査の単純集計結果をまとめた。今後ともさらに分析を重ねて、小学校との連携の取組みに関する課題や保育上の課題について検討していきたい。また、その過程で「学び」の捉え方についても検討していきたい。

参考文献

1. お茶の水女子大学附属幼稚園他「子どもの学びをつなぐー幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラム」東洋館出版社、2006
2. 国立教育政策研究所教育課程研究センター「幼児期から児童期への教育」ひかりのくに、2005
3. 佐々木宏子・鳴門教育大学附属幼稚園「なめらかな幼小の連携教育ーその実践とモデルカリキュラム」チャイルド本社、2004
4. 新潟大学教育人間科学部附属長岡校園「科学をつくりあげる学びのデザインー学びの壁を越える幼・小・中連携カリキュラム」東洋館出版社、2007

(2009年9月17日受理)